

聖書:ホセア書12章1～14節

説教:血の責任を彼に下す

はじめに

私たちは「責任」ということばを当たり前のように使っています。たとえば税金を納める責任とか、夫としての責任と言って、考えてみると私たちはいたくさんの責任を背負って生きています。それだけでもたいへんなのに、14節に「彼の主は、その血の責任を彼の上に下し」とあって、聖書も責任を問いかけてきて、どんどん息が詰まりそうになります。聖書でいう責任とはなになのか。その責任を私たちは果たせるのか。果たせなければどうなるのか。ご一緒に考えてまいります。

1 北イスラエル（エフライム）南とユダ

1) 偶像とともに歩んでいる

ホセアは北イスラエルで活躍した預言者でしたが、彼が語りかけた相手は北イスラエルだけではなく、南ユダ王国にも及んでいます。前回の箇所になります。11章12節後半にこうありました。「しかしユダは、なお神とともに歩み、聖なる方に対して忠実である。」これだけ読めば、ユダは素晴らしい信仰者であったかに読める。ところが意味はまったく反対なのです。翻訳の難しさにも関係するのですが、ここで神とか聖なる方というところは、実は偶像のことを指していて、皮肉で言っている。だから2節の「主には、ユダに対して言い分がある」とつながって、「誠実と公正を守り、絶えずあなたの神を待ち望め」と戒められるわけです。

2) 「勤労の実があれば不義は見つからない」

ではもう一方の北イスラエルはどうか。いろいろなことが書いてあるなかで8節に目を留めます。「エフライムは言った。『確かに私は富んでいる。私には力がある。私のすべての勤労の実があれば、私のうちに、罪となる不義は見つからない。』」

これは何を言っているか。当時の人々はこう考えていた。もし人に罪があるならば、神は罰を与えてどんなに働いても富を蓄えることはできないだろう。しかしもし人に罪がないのならば、神は恵みを与えてくださるのだから財産も増えるはずではないか。そうするとこうなる。財産の多い少ないを見れば、その人に罪があるかないかがわかる。では自分はどうかと言えば、こんなに富んでいる

のだから不義などあるはずはない。そういう論理です。これは実にわかりやすいし、金もちには大変魅力的な考え方です。でも貧乏人は救われないという話にもなるわけですから、やはりどこかおかしい。神はそのことを見逃しません。エフライムは自分に都合のよいように誤魔化しているのだと指摘します。

2 イスラエルと一人の預言者

1) イスラエル：妻を迎えるために働いた、番をした

そんな偽りと欺きのなかを歩んでいたエフライム(イスラエル)とユダですが、かつてどんなところを歩んでいたのか。ホセアは二つのできごとを挙げて思い出しています。一つ目は12節です。「ヤコブはアラムの地に逃げて行き、イスラエルは妻を迎えるために働いた。妻を迎えるために羊の番をした。」

創世記にあるように、イサクにはエサウとヤコブという双子の子どもがいました。ところがヤコブは父と兄をだまして長子の権利を奪い取って家を飛び出し、おじのラバンの家に転がり込んで羊の世話をすることになります。ヤコブは、厳しい仕打ちをするラバンに忍耐しながら仕えて十四年間羊の番をしてラケルと結婚するのです。やがてヤコブは兄エサウと和解するために故郷に戻る途中、御使いと格闘して祝福を願っていった。そういうできごとでした。ヤコブはかつては自己中心的な人間だったけれど、ラバンのもとでへりくだることを学び、信仰者となりました。ところがいまはどうか。ヤコブの子孫であるあなたがたは、まったく反対に高慢になってしまったというのです。

2) 一人の預言者：イスラエルを連れ上った、守った

イスラエルとユダのかつての歩みについて、二つ目に取り上げているのが13節。「主は一人の預言者によって、イスラエルをエジプトから連れ上り、一人の預言者によって、これを守られた。」一人の預言者というのはモーセのことです。モーセがイスラエルをエジプトから連れ上り、荒野の四十年間の旅ではモーセをリーダーに立ててイスラエルを

守った。これはもう説明する必要はないでしょう。

さあここで12節と13節を比べてみましょう。イスラエルはラケルを妻に迎えるために働き、羊の番をしました。いっぽう、一人の預言者であるモーセはイスラエルをエジプトから連れ上り、守りました。イスラエルと一人の預言者がまるでペアになるような書き方をしています。これは単なる偶然ではありません。なにかをたいせつなことを教えようとしています。

3 彼

1) 血の責任を下す

そのヒントは続く14節にあります。「エフライムは主の激しい怒りを引き起こした。彼の主は、その血の責任を彼の上に下し、彼のそしりに報いを返される。」

エフライムは主の激しい怒りを引き起こした。その理由はあきらかです。自分の親である主を捨てて異教の神バアルをこれが自分の親であると言って拝み、自分は豊かになったのだから罪などないと言い張り、欺いてきたからでした。

さて問題はその罪を神がどうされるかです。「彼の主は、その血の責任を彼の上に下し、彼のそしりに報いを返される。」

「血の責任を彼の上に下し」というところ、直訳すると「血を流した報いを彼に問いかける」という意味です。もっとわかりやすく言い直せば、罪を犯した者は必ずその報いを受けなければならない。水の流してなかったことにするとか、悪いことをしたのになにも罰を受けないとか、そういうことは絶対にない。必ず報いを返すと言っている。

悪いことをした人には厳しく聞こえることばですが、その反対にどうすることもできないような理不尽な苦しみに遭った人たちには、これは大きな喜びとなります。そのような人たちに代わって神がさばきをしてくださり、かならず元どおりにしてくださる。そのような約束だからです。

たとえばこの世でもっとも理不尽なことの一つとして、だれもが戦争を挙げるでしょう。そこで多くの人たちがいのちを落とし傷つきます。また最近、戦場から帰還した兵士たちも戦場トラウマで深く傷ついていることがわかってきて、社会問題になっています。私の父は二十代の前半で徴兵されて中国に行き、無事に帰ってきましたが無理がたたって肺結核を患い、思い描いていた出世の道を閉ざされました。その悔しさを埋めるために毎晩ぐでんぐでんになるまで酒を飲んでいました。今

振り返れば父も戦場トラウマを抱えていたのだと思うのですが、父はそのことで苦しんでいた。私もそんな父の影響を受けて育ちました。そのことはどうすることもできません。

2) イエス・キリストが背負われる

このように、どうすることもできない苦しみを抱えている人がたくさんいる。神はどうされるのでしょうか。その血の責任を彼の上に下す、と言われます。彼とはいったいだれでしょう。もちろん彼とは罪を犯した本人です。ここで言えばエフライムであり、ユダのことです。もっと言えば、私たちのことでもあります。いっぽう、前回見たとおり神はこのエフライムとユダを愛しています。わたしはあわれみで胸が熱くなっているとさえ言われます。あなたを見捨てることができないとも言われます。

では血の責任についてはどうしたらよいのでしょうか。私たちはこの責任を果たすことはできません。そこでローマ書8章3節にこうある。「肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」

イスラエル、そして私たちができなくなっていることを、一人の預言者として来られた主が代わりに成し遂げてくださいました。

さきほど、12節と13節はペアになっていると言いました。12節のイスラエルをイエスと言い換えてみてください。13節の一人の預言者をイエスを読み替えてみてください。そうするとこうなる。

「花婿であるイエスは私たちを妻として迎えるために、羊の番をするほどにへりくだり、聖なる神である方なのに一人の預言者となられ、私たちを罪というエジプトの地から救って守ってくださいました。こうして私たちが負うべき血の責任を彼、すなわちイエス・キリストに下し、罪ある者として十字架で報いを受けられた。」これが14節で言っていることです。

このように、ホセアはやがて来られるイエス・キリストを告げました。そして、その預言のとおりには主は来てくださいました。人は高慢となって裏切るかもしれません。人は欺きをもってだますかもしれません。しかしこの方はそうではない。この方に信頼して歩んでまいります。